

にも此の故事を載せたり。おもふに相州(武)の金澤も東鑑には金洗澤とあり。其の地名の濫觴同意の故事より起れるにや。三州志來因概覽附録に云ふ。金澤を今かねざは、或はかなざはとも呼べり。何れ正訓なる事知れず。といへり。平次按するに、天正十三年閏八月七日、豊臣秀吉公朱印の假字文に、左の如くかなざわと載せ給へり。

廿五日・廿九日の御ふみ一どに見り。このおもての事、くらのすけ色くなげき候まゝ、くにをめしあげ、いのち迄たすけ、あしよわりどもまでもことごとく、昨日はや京までさしのぼせ候。かんにんぶんすこしとらせ候。と山のしろ迄ことごとくわらせ候。まつちうをば又さへもんにつかはし候。はやひまをあけ候まゝ、とやまよりのふとなみ山までひまをおさめ候。けふはかなざわへこし申り。ちぢぎんきたのしやうには、四五日とうりう候て、くにのおきめなど申つけ候て、四日ころには大坂へかへり候はんなまゝ、ころやすかるべく候。又きあひもよく候。ふみばめちととく候まゝ、かゝせてこしり。めでたくな。

壬八月七日  
こほひで吉判

右は越中佐々成政征伐の時也。此の親誓に據れば、かなざはと天正十三年の頃呼びたりし事知られたり。尙此の外にも見えける歟。又三州志來因概覽に輓近の人々、奇を好むより加賀を賀蘭州、金澤を金陵と書けり。新井白石文集其餘諸名家文集にも往々見ゆ。又或は金澤を金府、金澤城を金城と書けり。是も正法に非ずといへども、皇國百五十年省語の通例なりと。さて舊藩中は金澤町を城下の總號にせしかど、慶應後明治十一年十二月、東京府以下諸府縣下郡區改正に付き、金澤町を金澤區と號し、區内を七連區に分けたりしが、同廿二年六月、市町村制に依りて、金澤市と號し、市中を十三區に分ちたり。

○市中沿革

金澤市中は、天正年間佐久間盛政在城の頃は、未だ亂世の際なりし故に、甚だ狭少の城下にて、漸く初めて市街を建て、町名を呼ばしめたりといふ。博伽雜談に云ふ。佐久間玄蕃尾山在城の頃、本町を尾山八町と云ふ。所謂西町堤

町南町・金屋町・松原町・安江町・材木町・近江町是なりと。但し右八町も、今存する町地には非ず。八町の内西町は、佐久間氏の時尾山城の正門の向ひにあり。堤町は其の時代城内にあり。南町は其の時城の南際にあり。故に南町といふ。金屋町は其の時後の金谷門前にあり。松原町は其の時松原門前にあり。材木町は其の時今の耕屋坂邊にあり。安江町・近江町は其の時代も今の地也と云ひ傳へたりと、三州志來因概覽にいへり。加府事蹟實錄に云ふ。昔金澤城地に本源寺ありし頃は、今云ふ御門前町不開門の前通り松原町、其の頃は此の邊町端にて、穢多など居住し、松原なるに依りて町名とすと。又云ふ。右穢多共を後に尾張町枯木橋邊へ追出したたり。枯木橋邊は小島網橋場何十ヶ所の内なりと云ひ傳へたり。又此の懸作と呼べる地は、昔は河原にて、一方の岸畔に棧作して纒かに商店を開き居たりしが、後土地を築き立て町地と成したれど、遺稱を存して今に懸作りと呼べる也と。龜尾記にも此の事を記載して、八田圓平家譜に略載すといへり。さて右八町の外は都て耕地にて、村落ども市街に接続し、今云ふ中町・尾張町の邊に小

坂村あり。故に今に至り大手先を小坂口と呼び、俗にをさかのしたといへり。是いにしへ小坂の村落、城郭の向うにありし故也と。又新町・今町邊に久保市村あり。上堤町邊に木・新保村、近江町邊に今市村、安江町・安江木町邊に安江村、石浦町に下石浦村、百姓町に上石浦村あり。又材木町・鍛先辻邊に田井村あり。小立野出羽町・石引町邊に山崎村ありといひ傳へたり。右等の傳説共にて、佐久間氏の時代に、今の町地は多分耕地なりし事知るべし。さて前田家と成りにし後も、國初の頃は狭少なりしと見えて、寛文十二年の箕浦高良筆記に、丹羽加賀守殿小松の城主にて松任も領知の頃、利家卿官腰より船にて御上洛、御茶道以下陸通り上京の處、松任にて爭論致し、松任の者共御茶道を打殺す。利家卿より加賀守殿へ御届の處、町並百人召捕進上被致、其地にて成敗可被成と也。此金澤安江町能登屋あたり三味張付場なり。利家卿紫の袖なし羽織にて、安江町に御馬立て、張付共を御覽被成。とあり。右安江町は尾山八町にて、佐久間氏に城の頃建てられし町地にて、升形橋邊は其の時代の街尾なりともいへり。されば利家卿入部し給ふ後